



継体天皇弟国宮と 古墳・豪族居館

展示期間 平成30年4月24日(火)
～平成30年6月24日(日)
※図書館休館日を除く

「日本書紀」には、継体天皇12年(518)3月9日に「弟国に遷都する」という短い記事があり、平成30年(2018)はこの遷都からちょうど1500年の節目の年にあたります。これを機会に本年は弟国宮を始めとして、長岡京市の古代史や歴史の催しを実施します。継体天皇は出自をはじめ謎が多く、古代史上のミステリーとも言えます。「弟国宮」の所在地もいまだ謎のままですが、長岡京市の井ノ内地区周辺は古くからその候補地とされています。ここでは継体天皇の弟国宮に関連するとみられる、井ノ内・今里周辺の古墳や豪族居館について紹介したいと思います。

井ノ内・今里地区の古墳

今里地区では、古墳時代前期末(4世紀頃)に前方後円墳の今里車塚古墳が作られ、その後古墳時代中期(5世紀頃)には庄ノ淵古墳、舞塚古墳といった小規模な前方後円墳が作られます。しかし井ノ内地区では小規模な方墳のみで、前方後円墳は作られませんでした。ところが古墳時代後期(6世紀頃)になると芝1号墳、井ノ内車塚古墳、井ノ内稻荷塚古墳といった全長40m前後の前方後円墳が次々と作られます。これは弟国宮遷都の時期以降であることから、これらの古墳を築いた人々と継体天皇との関連が考えられます。

・井ノ内車塚古墳

古墳時代後期前半に築造された全長約39mの前方後円墳です。近年の調査によって、後円部の埋葬施設が横穴式石室であることが判明しました。また、後円部の西側には造り出

しとよばれる施設が作られていて、造り出しの上には家形埴輪や、巫女形埴輪、鶏形埴輪・馬形埴輪・盾形などの動物埴輪や器財埴輪、石見型と呼ばれる特殊な形をした埴輪など多彩な埴輪が配置されていたことも明らかになりました。



井ノ内車塚古墳平面図(1/500)

・井ノ内稲荷塚古墳

井ノ内稲荷塚古墳は、井ノ内車塚古墳に続いて築造された全長約 46mの前方後円墳です。発掘調査では、全長約 10m、^{げんしつ}玄室の長さが約 5mの横穴式石室が確認されました。横穴式石室には、副葬品として鉄製武器や武具・工具・装飾品、そして多彩な^{すえき}須恵器が納められていました。

今里地区の豪族居館

今里周辺では、2 か所で古墳時代後期の豪族居館とみられる大規模な掘立柱建物がみつかりま^{ほったてばしらたてもの}す。一つは長岡三丁目で見つかった^{とうきまち}陶器町遺跡の大型建物。もう一つは今里四丁目の今里遺跡で見つかった建物群です。

・陶器町遺跡の豪族居館

見つかったのは1棟ですが、柱を据えるための穴は一辺1～1.5mと非常に大きく、柱の直径も35cmと太いものです。おそらく東側の段丘上に建物群が広がっているとみられます。

・今里遺跡の豪族居館

建物5棟と柵列1条が確認されました。建物群は方向をそろえて建てられていて、一部建て替えが行われています。このような立派な建物群は、当時周辺を治めていた豪族の居館と考えられます。

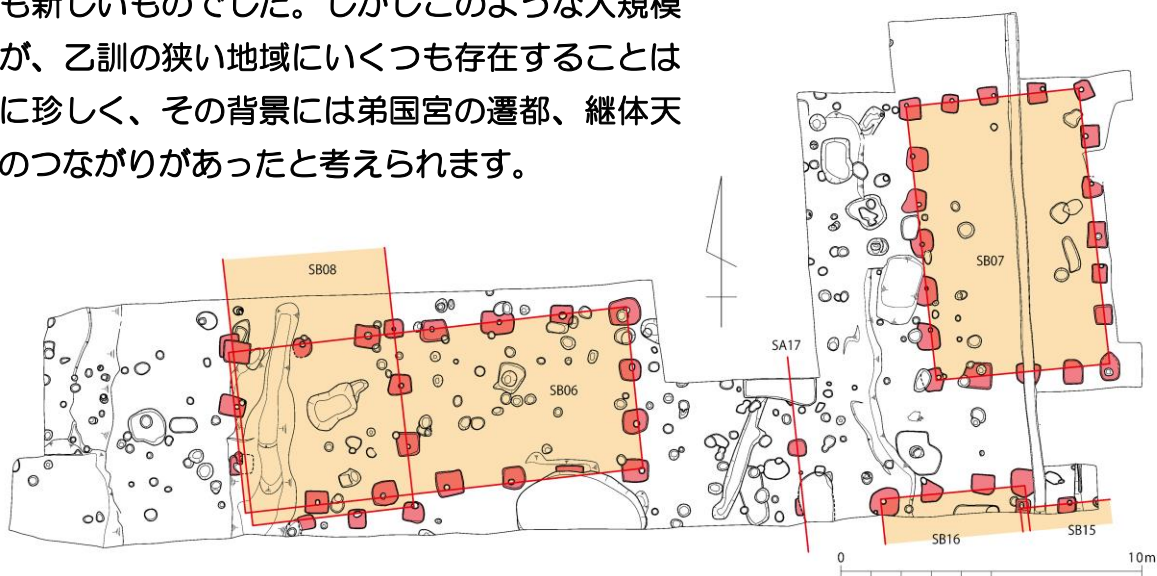
これら建物の時期は残念ながらいずれも「弟国宮」よりも新しいものでした。しかしこのような大規模建物が、乙訓の狭い地域にいくつも存在することは非常に珍しく、その背景には弟国宮の遷都、継体天皇とのつながりがあったと考えられます。



井ノ内稲荷塚古墳の横穴式石室



陶器町遺跡の豪族居館



今里遺跡の豪族居館 (1/250)